

食と人の架け橋 くじらのペンギンハウス

▽設立趣意書

現在、日本の食糧自給率は39%台を推移し、6割以上の食糧を外国に頼っています。そして国内の農業者の年代別割合は20代が1.4%、30代が3.5%、40代が5.1%、50代が12.5%、60代が30.4%、70代以上が47.1%と、60歳以上が8割を占めており、超高齢化を迎えている産業となっています。

高度成長期時代には、様々な専門職人が給料の上昇を期待して子供の職業を会社員にし、その孫も会社員となる流れを作り、一次産業の作り手を外国に依存する社会に変貌させてきました。しかし、現在は、一般職の割合が様々な専門職よりも多く、会社員同士が仕事を取り合って給料が減少してしまい、稼ぐことが出来るのは一般職ではなく、資格を持って専門職として働いている技術者や職人であるという時代の流れになりつつあります。

実際、大手企業では、営業職などの一般職の求人は減少し、メンテナンス等の技術職やコンピュータ関連のクリエイター職の求人募集が多いという所も出てきております。

もはや世の中のサラリーマンが、一生涯一つの会社に勤めあげるという終身雇用制度は崩壊し、社内起業家の育成や副業を推進する企業も増え始めています。

また、生活スタイルの自由度も少しずつ高まってきていますが、スポーツや文化活動などの趣味の世界に使う金銭的な余裕もバブル世代の人々に比べて減少してきました。

そこで、くじらのペンギンハウスは食と人の架け橋をコンセプトに変革を目指します。

農というキーワードを活用し、農産物を成長させるだけではなく、お客様と未来ある若者たちの大切な心と身体も育みます。

未来に希望を持たなくなっている若者が多い中、人として誇りをもって優雅に暮らしていくために、文化活動やアスリート活動に熱中する若者を応援したり、単なる会社員ではない一歩踏み込んだ、週末起業家等の第二の職業能力を開花させたり、様々なチャレンジ精神を持っている未来の日本を作っていく若者を応援していきたいと考えています。

そんな思いで私たちはかれこれ10年以上活動してきました。しかし、代表一人のマンパワーでは限界を感じ、このたび団体の法人化を目指し、チームとしてさらに大きな形で、世の中の変革を目指していきたいと思えます。

私たちは、生きていくために必要な「食」、つまり食べ物が農業界だけの特別なものではなく、誰にとっても身近な「植」になってほしいと考えています。そして「職」というものをいま一度見直してほしいと考えています。さらに、自分らしい「飾」を創造して、生きる活力を手に入れて、個性を磨いて自分「色」を大切にしてもらいたいです。

そんな人が一人でも多く増えるためにくじらのペンギンハウスは法人化に向けて動き出します。

令和 3年 4月18日
特定非営利活動法人くじらのペンギンハウス
設立代表者 花野 眞典